

フェローシップ・ニュース

43

第1回リカバリー・パレード「回復の祭典」が行われました！

「依存症、精神障がい、生きづらさ」から回復している本人、家族、友人、関係者、そして一般の賛同者が新宿に集まって、「回復」を喜び祝うパレードを行い、一般の人たちに回復の姿をアピールします。
(第1回リカバリー・パレード「回復の祭典」からのメッセージ)

小雨降る9月23日の秋分の日、新宿中央公園にパレードに参加しようと多くの人たちが集まりました。集合してから断続的に雨が降り続け、少し小降りになった時点でパレードがスタートしました。ダルクからは日本ダルク アウェイキングハウス、川崎ダルク、横浜ダルク、奈良ダルク、潮騒ジョブ・トレーニング・センターのメンバーが参加していました。そしてマックなどの依存症の施設や自助グループ（NA、AA、断酒会、GAなど）のメンバー、家族、援助職、一般の方、マスコミも含め総勢約350名と予想を超える人数になりました。警察の車両に先導されながら、ダルクの琉球太鼓やメンバーによるコーラス隊やベリーダンスの演舞。そして思い思いの横断幕やプラカードを持ちながら新宿界隈を約1時間かけて歩きました。コースの中間地点の新宿駅南口を通過したあたりからドシャ降りになり、それでも何とかゴール地点の花園神社付近まで無事に辿り着くことが出来、参加者それぞれが喜びに満ちた表情をしていました。

翌日24日の朝日新聞と毎日新聞にパレードの様子が掲載されました。また、このパレードの準備から当日までを追ったドキュメンタリー番組を作ろうとNHK「福祉ネットワーク」の取材が行われ、10月19日に放映されました。アメリカでは既に10年以上前からこのようなパレードが開催されていますが、日本では全く初めての試みだったのでメディアも注目したようです。アパリもこのパレードの協力団体として参加しています。来年の実施が決まり次第、情報を掲載していく予定です。

今回参加されなかった方も来年は参加してみたいかがでしょうか？



新宿中央公園、パレード出発前の様子
傘やカッパを用意して集合！



甲州街道の新宿駅南口。太鼓は歩行者の注目を集め、写真を撮られる場面もありました。この頃雨がひどくなったため、太鼓の演舞は終わりとなりました。



ダルクによる琉球太鼓の演舞、メンバーによるベリーダンスもあり、パレードに華を添えました。

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日
2010年11月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所 (Asia-Pacific Addiction Research Institute)の略称です。

全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

目次：

リカバリー・パレード「回復の祭典」が行われました	1
JICA & アパリアイビツプロジェクト第2回本邦研修報告	2
シンポジウム「依存問題を発達障害から考える」報告	5
入寮者からのメッセージ…エン	6
ダルクのイベント	7
アパリからのお知らせ	8

JICA & APARI フィリピンプロジェクト 第2回本邦研修報告 2010/8/17～28

スケジュール

	日付	午前	午後	夜
1	8/17(火)		13:30成田空港到着	歓迎会
2	8/18(水)	ダルク25周年フォーラム		懇親会
3	8/19(木)	JICA地球ひろば訪問	ビジネスミーティング	
4	8/20(金)	NAコンベンション(横浜)		近藤誕生会
5	8/21(土)	NAコンベンション(横浜)		
6	8/22(日)	NAコンベンション(横浜)		午後:東京観光
7	8/23(月)	フィリピン大使館訪問		東京 藤岡へ
8	8/24(火)	三浦、山本による研修		琉球太鼓鑑賞 ワークショップ・HIV等感染症
9	8/25(水)	ワークショップ・ヨガ	ワークショップ・動機づけ面接法	NA
10	8/26(木)	藤岡 京都へ		京都ダルク見学
11	8/27(金)	龍谷大学にて講演会		奈良ダルクにて講演会
12	8/28(土)	午前:京都観光	14:20伊丹空港発 15:35成田着	18:40成田出発



Birthday Party In
Yokohama
近藤恒夫69歳



東京タワー
階段で登る



秋葉原にて



ダルク25周年懇親会にて



JICA地球ひろば 表敬訪問



フィリピン大使館 表敬訪問

< 東京 >

昨年に引き続き、フィリピンから新しいコアメンバー2名(キンバート氏、キャロル氏)が本邦研修に参加するため12日間滞在しました。

今年はダルク25周年でもあり、フィリピンのメンバーたちにも出席してもらいたいという近藤の思いもあり、ダルク25周年フォーラムと本邦研修の日程を合わせました。また、NAの大イベントである横浜で開催されたNAコンベンションとも重なったため、盛りだくさんの内容でした。

また、JICAからの提案でJICA地球ひろばやフィリピン大使館の表敬訪問が実現しました。

大使館ではコンフィアード総領事とお会いし、この事業の「意義」を説明し、さらにマニラ市が抱える薬物問題について意見交換が行われました。FWCとアパリの活動に興味を示され、事業について様々な質問をされました。「薬物問題は家族が抱える問題なのです。」とキンバート氏が述べると、「コミュニティや社会全体に関する問題でもありますね。」とコンフィアード総領事から言葉をかけられました。

< 横浜 >

コンベンション会場の雰囲気や演出などとても素敵でフィリピンから来た2人がとても感銘を受け、自分たちの国でもこんな風にできたらいいなあ、と言っていました。

2日目の夜のクリーンカウントダウンにも参加し、会場にいた大勢の仲間たちのカウントダウンに喜び、盛り上がっていました。



NAコンベンション会場にて
(横浜赤レンガ倉庫)
左がキャロル氏、右がキンバート氏



NAコンベンション会場にて

< 藤岡 >



ヨガのワークショップ

昨年好評だった神田先生のヨガのワークショップを開きました。ヨガマットにブロックと様々な道具を使い、昨年よりも少しレベルアップした内容でした。

ヨガは呼吸を通して心と身体を整えるというものなので、依存症からの回復の一助になるものと考えます。アメリカのセレブの施設でもヨガを行ったり、日本でも横浜、スルガ、栃木ダルク等でも取り入れられています。

原井宏明先生を招いて動機づけ面接法（モチベーションインタビュー）のワークショップを開催し、これには刑務所職員3名、横浜ダルク、群馬ダルクから参加希望があったため、一緒に受講することになりました。

5つの大原則「共感、矛盾を広げる、言い争いを避ける、抵抗を手玉にする、自己効力感を援助する」から援助技法を学ぶとともに、どんな答えづらい質問に対しても即座に答えるという技を披露していただき、これはダルクの入寮者からの困った質問に対応するときに役立ちそうです。



動機づけ面接法のワークショップ



散歩の途中で



琉球太鼓の演舞の後に記念写真

昼食後にプログラムで毎日練習している琉球太鼓をスタッフ、入寮者計7名で披露しました。

キャロル氏は今年の2月にフィリピンで開かれたNAコンベンションでこの太鼓の演舞を見たことがあり携帯に写真や動画も撮ってありました。同じものが見られたと大はしゃぎでした。

< 京都・奈良 >

8月26日に本邦研修中のキンバート氏とキャロル氏を京都に案内し、京都ダルクを見学しました。翌27日の午前中、龍谷大学矯正保護・総合センターで「フィリピン薬物依存治療事情」の講演会を開いて、それぞれの体験談を話しました。午後には、奈良ダルクの「フィリピンのハイリスク群介入を学ぶ」と題する講演会でも、フィリピンの薬物依存者の社会復帰が貧困層では難しいという状況等について話をしました。



龍谷大学矯正保護・総合センターにて



左が京都ダルク
右が奈良ダルク



奈良ダルク研修センターにて

フィリピンの2002年包括的危険薬物規制法15条は、初犯の薬物自己使用事犯者に対する6カ月以上1年以下の政府のリハビリ施設（保健省管轄）への入所を義務付けていますが、実際には、予算不足のため、事実上末端ユーザーが野放しになってしまっていると聞いています。そのためフィリピン保健省はアパリが提供するほとんどコストのかからないコミュニティー・ベースの通所プログラム（ARMミーティング）を歓迎してくれています。



京都 三十三間堂にて

京都ダルク、奈良ダルク、龍谷大学矯正・保護総合センターには今回の本邦研修では多大なご支援を戴きました。厚く御礼申し上げます。

JICA & APARI フィリピンプロジェクト「フィリピン薬物依存治療事情」 龍谷大学矯正・保護総合センターでの講演から抜粋

沖縄ダルク・三浦陽二

最初に近藤から沖縄ダルクは、目標をハイクラスのダルク、スタッフ養成のダルク、アジアの中心となるダルクにしろと言われた。マスコミからの協力などもあり発展したが、しかし、アジアの中心には至っていない。ダルクのプログラムはNAのプログラムと共通している。仲間の手助けをする中で自分が変わっていく。止めなさいと言うのではなく、仲間の手助けをするなかで使われないでいられるようになる。変っていく姿で自分のプログラムが間違っていないと確信していった。日本のNAができたのは、ハワイの仲間の力が大きかった。お金などもハワイのメンバーが献金して日本のグループが成長していった。日本がしてもらったように、他の国にも援助していくんだと思った。しかし、実現し始めたのはここに2～3年。各地域の差を考えながら支援していかないといけない。海外のプログラムをそのまま持ち込むのはいけない。ヘーゼルデンを見学しに行った時、600人の職員がいてそのうち200人が健常者で400人が依存症者であった。世界的な施設として思い浮かぶのはそこで、そのプログラムで気付くことが多かったが、日本にそのまま持ち込んで合わないと思った。例えば、ヘーゼルデンではシンナーの人は今まで来た事が無いと言われた。ブルーカラーを受け入れていなかった。ホワイトカラーの人だけだった。

1998年、ワールドカンファレンスの会議に出たが、リッチーがフィリピン代表で来ていた。その時に近藤が紙飛行機を飛ばしだして、リッチーがそれを覚えていた。この人はおかしいと思ったという。そのころはあまり関わる機会がなかったが、2回目に12ステップの施設を見に行ったらリッチーの施設だった。その後関わりが出来た。今でもそうだがフィリピンのプログラムはお金のある人だけ。桁外れの金持ちが参加する。残念ながらそういう人の中で、来日したときにNAのミーティングに来てくれる人がほとんどいなかった。フィリピンでは、ミーティングはビバリーヒルズのような高級街など警備の厳しいところで行われていて、貧困街までは至っていない状態だった。当時、シャブがはやり始めていた。いわゆるジャパユキさんたちがシャブを覚えて帰ってきて、他にはハイコデイン（日本では鎮咳薬）などが薬局にあたりたりした。運命的にリッチーと知り合って、フィリピンでの支援が自分のやるべきことではないかと思った。一方で沖縄で15年活動していて飽きてきたし、東京に帰りたいたいと思いついて、次第にフィリピンと一緒にいく仲間を誰にするか考え始めていた。しかし、薬物の広がる理由は日本と違う。日本では自己評価の低さだったり、仲間同士の繋がりだったりするが、フィリピンでは貧困が大きな原因の一つにあげられている。それを思い知らされた。彼らにとってはパンよりもシンナーが安いから、空腹を抑えるために使っている。それを目のあたりにして、考えなくてはならないと思った。貧困をなくすことが薬を止めるために必要なら、それが僕らにできるのか。どこまでできるのか、仕事もプログラムとして必要ではないのか。仕事をあっせんしたり、仕事を作ったり、食事を配ったり、プログラムに来てもらう方法も考えなくてはならない。どうしても貧困などは僕らの考えだけでは済まないところ。日本のいいところをフィリピンに合うところを探して欲しいと思っている。フィリピンの彼らはよく勉強していて、問題意識をしっかりと持っている。僕らは教える立場だけではないと思った。例えば、日本ではNAのベーシックテキストの翻訳にかなりの時間がかかったが、フィリピンでは早々と翻訳して知っていた。しかし、情報が早くても、貧困層には伝わらないという問題がある。現状コアメンバーも富裕層が中心である。プログラムが進んで行ったら、率先して貧困層にメッセージを伝えて欲しいと思っている。僕が出来ることは発想面。例えば、フィリピンにダルクを作るならどうするかを考えてみる。貧困層に病院自体が無い。もしダルクを作るにしても足りないものは多いし、彼らに必要なのかもわからない。

キンバート氏体験談（フィリピンプロジェクト コアメンバー）

私は裕福な家庭に生まれ、私立の男子校に通っていた。私はマニラの高校で寮に入った。その当時、アルコールやパーティー遊びを覚えた。1984年に友人からシャブを誘われて使うようになった。これを使っていると一晩中楽しく遊べるといわれて試してみた。すぐに世の中のせいにしたり、最初はパーティー目的だったが嫌なことがあればすぐに使っていた。そのうち、私の家族、兄弟とけんかした時に使ったり、多くの時間を薬につき込み、良い時も悪い時も使うようになった。大学も終了できない状況になり、パーティー生活をやめ、ドラッグから離れようと、マニラを出た。その後4年間はクリーンだった。家族のもとに戻り、郊外で父の手伝いをしていた。結婚も夢見ていたが父との関係がうまくいかなくなってしまい、またドラッグを使いたいと思うようになった。2003年頃お金も使い果たし、農園も売り払い、全て薬に費やした。家族は心配し始め、回復のためにリハビリ施設を探すようになった。家族は最初に精神科医に私を連れていき、その医師はリハビリのプログラムを提案した。家族と精神科医と一緒に私の飲み物に睡眠薬を入れて眠らせ、起きてみたら精神病院に入れられていた。自分には問題はないと思っていたし、プログラムは不要だ、どうしてこんなところに入れらるんだと家族に訴えた。入院1ヶ月後に修道女が運営しているリハビリ施設に行った。そのプログラムオフィサーはヘーゼルデンで訓練を受けた人だった。45日間で12ステップ中のいくつかのステップを行い、それ以外ではグループセラピー、精神病院に戻って状態をチェックし服薬を続けるなどした。私はNAとAAを紹介された。夜はそちらに通い、オールドタイマーと出会い、スポンサーを見つけてはどうかと提案された。選んだスポンサーはリクスしてしまっていたが、私はミーティングに通いつづけることにした。7年間通い続け、自分の回復にとっては周りを助けることが重要だと知った。ミーティング開始前の準備をしたり、そうしたサービスを何年か続け、ホームグループの一員になる事を誘われた。NAのオーガナイズに誘われたりいろいろな手伝いをする中で、FWCとアパリの事業に関わることになった。ここに来る前は実際何をするかわからなかったが、次第に何をすべきか何をするのか分かってきた。

正直まだ私もステップを実行している段階です。失ったものを取り戻すことはできないが、回復によって新しい人生を築き上げるようになった。何よりも今回の機会は周囲の為にも、自分の回復の為にも感謝したい。ありがとうございました。

書籍のご案内

- 目次
プロローグ のりピー、ダルクへおいでよ
第1章 絶頂からの転落～そして再起 わが波乱の半生
第2章 誰が、なぜ、ヤク中になるのか
第3章 あまりに知られていない覚せい剤の世界
第4章 なぜ薬物依存者は立ち直りにくいのか
第5章 立ち直るためにはどうすればよいのか
第6章 新生した仲間たち

発売：双葉社
定価1,400円（税別）

拘置所のタンポポ
日本ダルク代表
近藤恒夫 著

住所、名前、電話番号をご記入の上、下記のFAXあるいはメールにてお申し込み下さい。

FAX：03-5830-1791
メール：info@apari.jp

次号に、もう一人のコアメンバーのキャロル氏の体験談を掲載する予定です。

シンポジウム 「依存問題を発達障害から考える」

第1弾 福岡

10月24日(日)福岡の八百治博多ホテルにてワンダーポート主催の「依存問題を発達障害から考える」のシンポジウムが開催されました。当日は雨の中、約30名の参加がありました。

今回の講師の関水実氏（横浜市発達障害支援センター所長）からは、「発達問題から見た依存問題」と題して、長年自閉症の方の支援を行ってきた経験から様々な事例を基に発達障害の持つ特徴や対応方法などわかりやすく解説していただきました。

高澤和彦氏（浦和まはろ相談室代表・精神保健福祉士）からは「依存問題から見る発達障害」と題して、ミーティングはどういう人に効果的なのか、ミーティングの適性について、そしてこれ以上障害を作り出さないためにはどのようにしたら良いかなどあらゆる角度からのお話がありました。

西村直之氏（リカバリーサポートネットワーク代表理事・精神科医）からは「発達障害を意識したプロブレムガンブラーの回復支援」と題して、諸外国の調査研究からわかったことや、発達障害と摂食障害についても関連がわかってきたなどの報告がありました。

また、中村努氏（ワンダーポート施設長）からも「発達障害と向き合ってきたこと」というテーマで施設での経験や、ワンダーポートのプログラム紹介や支援の流れについてお話がありました。

シンポジウムではコーディネーターを稲村厚氏（ワンダーポート理事長・司法書士）が務め、参加者からの声を拾い、それぞれの立場からそれに答えるという方式で行われました。

参加者は家族、援助職、矯正施設職員などでした。参加者から「今までどれをやってもしっくりいかなかったが今日の話聞いて繋がった気がした。多くの材料を用意してそれに合った支援を考えていきたい」と感想を述べていました。

これから全国4ヶ所で開催しますのでぜひご参加いただき、それぞれの立場からのご意見や、支援のあり方について一緒に考えていきましょう！

全国で開催します！

第2弾 札幌 平成22年11月14日（日）10時～16時
札幌コンベンションセンター

第3弾 京都 平成22年12月19日（日）10時～16時
龍谷大学 深草キャンパス21号館604教室

第4弾 広島 平成23年1月23（日）10時～16時
RCC文化センター

第5弾 仙台 平成23年2月20日（日）10時～16時
仙台ビジネスホテル 第2会議室

ゲスト：京都のみ 十一元三氏（京都大学大学院医学研究科教授・精神科医）
広島のみ 市川岳仁氏（三重ダルク施設長）

西村直之氏は福岡のみ参加です。

主催：ワンダーポート 協力：アパリ

お申込みはワンダーポートまで（045-303-2621）参加費：2,000円



依存症と発達障害を併せ 持つ方を対象とした ミーティング 「はっぴいたあん」 のご案内

依存症の問題以外に、発達障害（AD/HDやアスペルガー症候群、学習障害など）の問題を持つ人の集まりです。診断を受けてなくても、自分にその傾向があると思っている人も対象です。ワンダーポートを利用されていない方でも参加できます。

日時：毎週木曜日

19時～20時30分

会場：ワンダーポート

参加申し込み：不要

参加費：1回50円

家族や関係者のご参加はご遠慮ください。

主催：NPO法人ワンダーポート

：045-303-2621

JCCA定例会＆セミナーin河口湖

10/3～5に行われたJCCA定例会＆セミナーにおいて、今回は依存症と発達障害をテーマにした学習会が行われました。講師は三重ダルク施設長の市川岳仁氏でした。既に三重ダルクでは発達障害の問題を持つ人たちに夏みかん農園という働く場を提供しています。そういった実践の現場からの報告がありました。

昨今、依存症の援助の現場でこの問題が多く取り上げられるようになりました。依存症という側面からのアプローチだけでよいのか？ 今一度考える機会が増えたように思えます。

（JCCAとは、全国のダルクやマックなどの12ステッププログラムを中心として活動している団体が参加する日本カトリック依存症者のための会です。）

アウェイクニングハウス 入寮者からのメッセージ

「選 択」

エ ン

私は、今回覚せい剤を使って刑務所に入り、現在施設に繋がりました。

16歳の頃からシンナーに手を出した私はお決まりの暴走族に入り毎日のように暇があれば吸っていました。両親の顔色を見れば駄目なのは分かっていたのですが全く止まらなかったですが、仕事は真面目にしているから、“別にいいだろう・・・。”とか“いつか止めるからいいだろう・・・。”とっていました。

私が20歳の頃、当時付き合っていた彼女の兄貴が「エン、シンナーが止められる物があるよ。シンナーよりもいいよ。」などと言われ、勧められ、それが覚せい剤(シャブ)だというのは、分かっていたのですが好奇心に火が付き、ついつい手を出してしまいました。シンナーに手を出したのも人生の選択ミスというのに、とうとうシャブにまで手を出してしまいました。覚せい剤に手を出した初めは、コントロールして使用出来ると信じていましたが、使い続けるうちに、消費者金融に手を出す程崩れ始め、21歳にして首が回らなくなる位にちもさっちも行かなくなりました。

そして生き詰まり、両親に嘘を言い、借金を肩代わりしてもらいましたが、それでも止まらず薬に手を出し、一度家を出され、生活を出来ない状態になりましたが、当時付き合っていた彼女と一緒に薬を止めて一からやり直そうと決め、何とか止められました。・・・いや、止められたと思っているのは上辺で、常に頭の中ではやりたいとっていました。

26歳の頃、一度結婚をし、その頃から仕事も自営として独立した時がありました。仕事は、何をしても失敗、請ければ赤字、ひどい時は集金も出来ず仕事をするのが苦になりましたが、“何とかしなければ・・・”と必死になれば家を省みず、28歳には離婚という形になりました。

それから2年、毎日隙あればきっかけがあれば薬をしようと思っていました。仕事は少しずつ信用が付き、29歳の頃には大阪府知事の許可を取り、職人も17名を抱え、頑張っていたのですが、30歳になった自分に待っていたのは薬の欲求でした。自分の店の忘年会の帰り、酒で酔っていた私を送ってくれていた職人に、欲求を打ち明けてしまいました。正直、“人を巻き込んでいいのか？”“せっかく止めていた薬にまた手を出して後悔しないか？”と迷いましたが、薬を目の前にすれば一瞬で迷いが消え、とにかく使ってから考えようと思いましたが、使えば考える所か1週間後には、また買いに行く始末です。薬の使用インターバルも1週間から毎日になり、毎日が日に3回と薬を打ち続け、いつの間にか仕事はそっこのけで、シャブ仲間との付き合いが酷くなり事業資金も薬代に消えて行き、薬中心の生活、薬の為の自分になってしまいました。

仕事も疎かになり、32歳の頃一つ目の事件、ひき逃げを犯してしまいました。薬によって正しい判断が出来ずにいたので保釈で出て裁判期間中にも薬に手を出してしまった結果、すぐ2つ目の覚せい剤によって捕まりました。

捕まる事があっても、絶対刑務所に入る事はないと思っていたのですが、とうとう、刑務所へと収監される事になりました。しかし、刑務所という施設は自由はないものの、一人になれる時間が多い為、よく自分の事を振り返りました。何故、止めていた薬に再び手を付けたのだろうか、もっと早く薬を止める方法はなかったのか、そう思う日々が続くと、両親の悲しい顔が自然に出てくるようになりました。自分が、軽はずみで覚えた薬の快樂によって与えた周囲の影響は計り知れない事だと思いました。身体がシラフに戻るにつれ、何故あのような選択しか出来なかったのかよく考えます。

現在は仮出所し、群馬の藤岡DARCに入所しました。毎日のプログラムでミーティング中心の生活をしていくうちに、自分が薬物に対して無力だった事、ただ気力だけでは治る病気ではない事だと仲間の話を聞いたりして分かってきました。また、毎日エイサーという「琉球太鼓」の練習をし、先行く仲間に指導をしてもらっている間に、今はエイサーの練習が楽しくて楽しくてしょうがありません。

まだ、入所して間もない私ですが、この前山梨県に行き、山梨県警とDARCのソフトボール大会に行く事が出来ました。試合は最後の最後に逆転で負けましたが、全員が一致団結し頑張ったので感動しました。(久し振りに泣けました)笑。

このような感情が素直に出るのはクリーンな身体だからなのかな?と思います。この施設に繋がり、仲間と回復し分かち合う事により、1日クリーンな生活を続けられる事が、今の自分の目標です。

アパリ発行
「Born・Again
(ボーン・アゲイン)」
体験談 販売中!

2005年5月に第2版が発売になりました。

体験談が13人分収められています。

アパリではこの本を拘置所や刑務所にいる人への差し入れ用として使っています。

定価：1,500円
(会員価格:1,000円)

お申込はメールか
ファックスで
FAX：03-5830-1791
メール：info@apari.jp
ご住所、お名前、お電話番号をご記入の上お
申込下さい。

ダルクのイベント

山梨県警とのソフトボール大会 10/11(祝)

10/11体育の日の午後、ダルクの「ドリームチーム」と山梨県警チームでソフトボール大会が開かれました。

今年で3年目、過去5試合とも負け続けていました。今年は山梨をはじめ、東京、名古屋、静岡、藤岡など10ヶ所のダルクから有望な選手を約100名集めて「ドリームチーム」を結成させ、何とか山梨県警に勝ちたいと望みました。相手は南甲府署、県警本部ソフトボールクラブの警察官25名です。

試合は接戦で最終回まで10対10の引き分けでしたが、最後の最後に山梨県警がサヨナラ勝ちとなり、惜しくも敗れてしまいました。笑いあり、涙ありの感動の試合となりました。来年こそは絶対に勝つぞ！と皆意気込みを見せていました。

「薬物の再犯防止には仲間や地域社会との関わりが必要。交流試合などの取り組みは全国にも広がって行って欲しい」と近藤恒夫は語っていました。



お知らせ！！

DARS 第6回 薬物依存症者回復支援 セミナー開催！

2010年12月11日(土)12日(日)
会場：金沢市ITビジネスプラ
ザ武蔵
参加費：3,000円+カンパ
主催：龍谷大学矯正・保護総
合センター
締切：11月22日(月)
申し込み・問い合わせは
電話：075-645-2040
FAX：075-645-2632

関口教会バザー 10/17(日)

毎年、カトリック関口教会(東京都文京区)で行われているバザーにダルクの琉球太鼓のメンバーを招待し、披露の場が設けられています。

今年は、藤岡、川崎、横浜、千葉、市原の各ダルクから選抜された仲間が太鼓を叩きました。上野の日本ダルクからも多くの仲間が参加し、会場の後片付けや清掃などのお手伝いをしました。

琉球太鼓が終わり、近藤恒夫も駆けつけ、皆で記念写真を撮りました。



マック・ダルクセミナー 10/20(水)

関東近郊のダルクやマックの16の施設が集まり、年に1度セミナーを開いています。

今回は「回復」というテーマで分かち合いが行われました。その一環として、アパリソーシャルワーカーの古藤が「感染症予防」というテーマでワークショップを開きました。HIVやB型・C型肝炎の感染症を予防するにはどうしたらよいかという、とても具体的でわかりやすい内容でした。実際に予防のためのグッズも用意しユーモアを交えながらの楽しいワークショップとなりました。

また、ご希望があれば全国のダルクやマック等へ出向いてワークショップを開くこともできますので、興味のある方はアパリまでお問い合わせください。





特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

アパリ東京本部
〒110-0014
東京都台東区北上野2-2-2
電話 : 03-5830-1790
FAX : 03-5830-1791
Email : info@apari.jp

アパリ藤岡研究センター
(運営: 日本ダルク アウェイクニングハウス)
〒375-0047
群馬県藤岡市上日野2594番地
電話 : 0274-28-0311
FAX : 0274-28-0313

- 【入寮条件】
1、薬物依存から回復・自立しようとしている本人
2、男性(年齢制限なし)
【入寮期間】
基本的に13ヶ月
【入寮費】
月額16万円 (初回17万5千円、生活保護の方も可能)



ホームページもご覧ください
<http://www.apari.jp/np/>

発行者: 近藤恒夫
編集責任者: 志立玲子
平成22年11月1日発行
定価 1部 100円

<アパリの司法サポート>

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決を受け、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、**はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。**

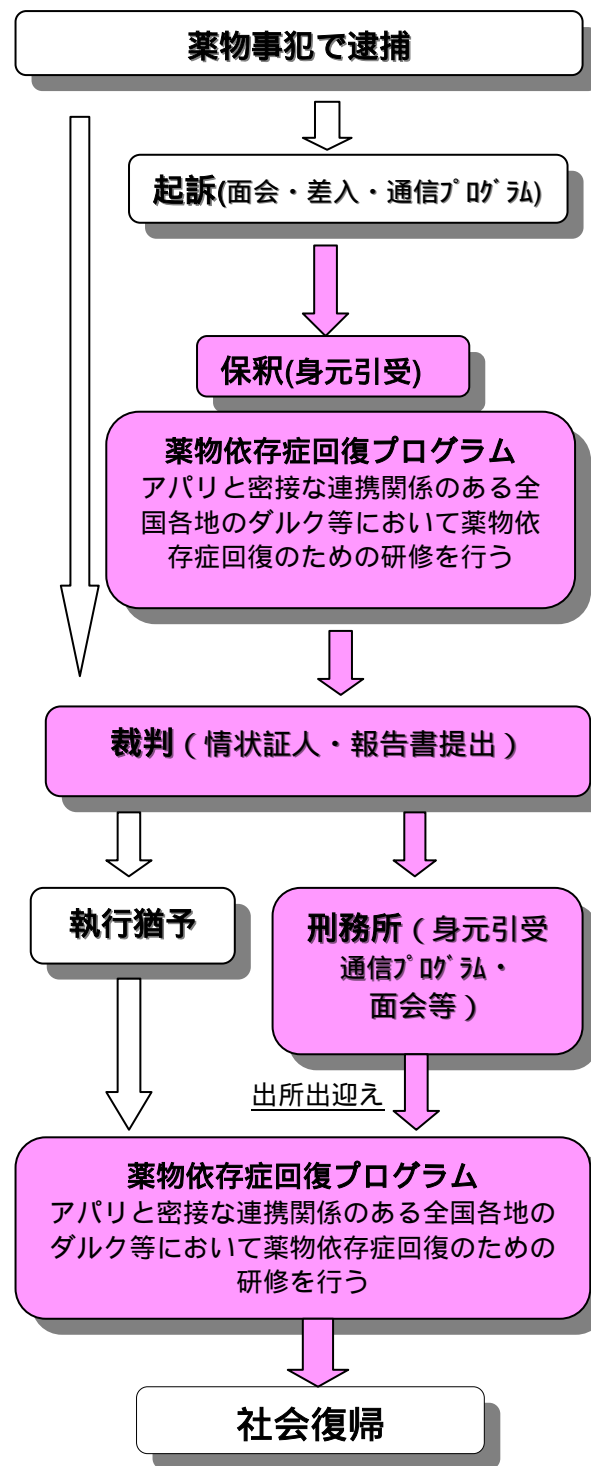
保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本の覚せい剤事犯の再犯率は約60%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は10%以下です。最近では特に、**受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に**出迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

ギャンブルの問題が原因で逮捕された方もご相談ください。

[費用: コーディネート契約料として一律20万円。交通費・宿泊費の実費が別途必要です]

【お問合せは東京本部まで】

アパリの支援



<アパリ・家族教室>

日時	テーマ	ファシリテーター
11月1日(月)	家族の落とし穴	町田 政明
11月15日(月)	ハイパーパワーについて	町田 政明
12月6日(月)	家族神話(家族ならば.....)	町田 政明
12月20日(月)	新しい生き方	町田 政明
1月17日(月)	回復という奇跡	町田 政明

平成23年1月3日(月)は開催しません。

- 【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族、知人、友人、援助職従事者
【日時】第1・第3月曜日18:30~20:30(祝日も開催します)
【場所】アパリ・クリニック上野2階 【参加費】3,000円(2名の参加は4,000円になります)
【内容】ファシリテーターと家族との分かち合いを行います。【予約】不要です

<個別相談・カウンセリング>

- 【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族・本人など 【料金】45分 9,000円
【場所】アパリ東京本部【カウンセラー】町田政明(元神奈川立せりがや病院勤務、ホープビル代表、寿アルク理事)【予約】アパリ東京本部 03-5830-1790【注意事項】当日のキャンセルや変更の場合は全額いただきます。